Japan-France workshop への参加

氏名：　工藤 稜央

班名：　[A01] メゾヒエラルキー造形 矢貝グループ

所属・学年：　千葉大学　大学院融合理工学府　博士前期課程 1 年

留学期間：　2024 年 3 月 15 日-3 月 21 日

訪問先：　フランス・パリ

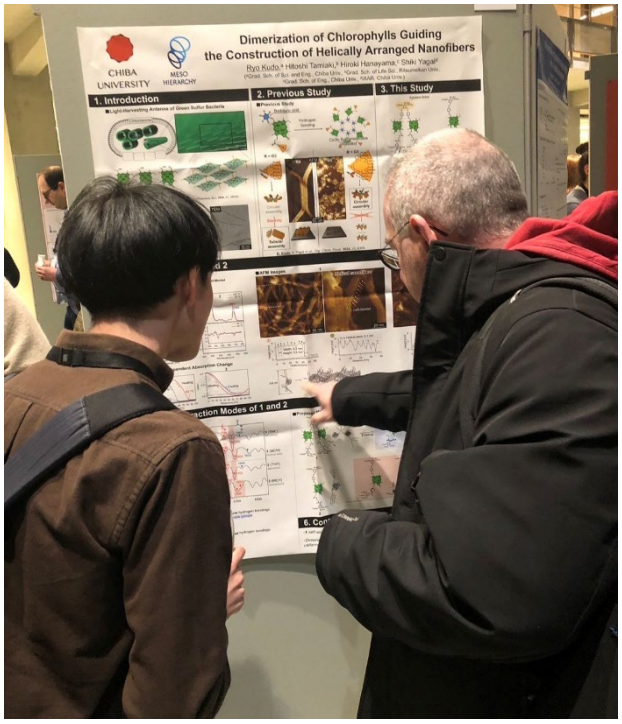
このたび、フランスの École normale supérieure Paris-Saclay（ENS Paris-Saclay ）にて開催された Japan-France 合同ワークショップに参加し、ポスター発表および口頭のフラッシュプレゼンテーションを行う機会をいただきました。私にとって初めての海外渡航および英語での発表となったこともあり、非常に多くの学びと発見がありました。この留学体験記では、学会での発表や交流、観光についての経験を報告します。

ワークショップの大半は、Steven De Feyter 教授や Marie-Claire Schanne-Klein 教授の基調講演をはじめとする先生方の口頭発表を聴講しました。自分の研究内容と離れている分野の発表は完全に理解するのが難しかったですが、専門外の研究に触れることで、新しい視点を得ることができました。また、発表そのもののスタイルからも学ぶことが多くありました。視覚的にわかりやすいスライドの作成や、専門外の聴衆にも伝わるような簡潔な説明の仕方は非常に参考になりました。特に、重要なポイントを強調しながら話す技術や、聴衆の反応を見ながらプレゼンを進める姿勢が印象的でした。難解に感じる発表も多かった中で、それでも自分なりに得られる視点があったことは、小さな自信にもつながりました。そして、自分の研究と他分野をどう結びつけられるかを考えるヒントにもなったと感じています。今後は、そうした関係性を見出すことに加え、それを専門外の人にも伝わるかたちで表現する力も、さらに磨いていきたいと強く感じました。

私の発表は、ポスターセッションとフラッシュプレゼンテーションの 2 つの形式で行いました。フラッシュプレゼンテーションでは、2 分半という限られた時間内で要点を伝えなければならず、スライドのデザインの簡潔さや、少ない文章量でも伝わるような原稿の作成が求められました。特に、結論を先に提示し、視覚的にわかりやすいデータを強調することを意識しました。正直なところ、本番は原稿を暗記するのに精いっぱいでしたが、できるだけ棒読みにならないように、強調したい

集合写真

ポイントを意識しながら発表しました。また、ポスター発表では、研究内容をより詳しく説明する必要がありましたが、ここで言語の壁を感じる場面も多くありました。幸いなことに、私のポスターには日本人だけでなく、フランスや中国からの参加者も訪れてくださり、想像以上に多くの議論を交わすことができました。さまざまな訛りがあったことと自分の英語力の欠如が重なり、聞き取ることが困難な場面が多々ありました。身振り手振りや図を活用しながら説明することである程度は意図を伝えられたものの、専門的な議論を深める際には言葉がスムーズに出てこない場面もありました。そのような中でも、ポスター発表を通じてさまざまな国の研究者とディスカッションを交わせたことは非常に有意義であり、今後の課題をより明確にすることができました。



ポスターセッションの様子

学会を通じて、フランスの研究者や他国の参加者の方々と交流する機会も多くありました。コーヒーブレイクや昼食の時間にはできるだけ外国人の方々と積極的に会話するよう努めました。研究内容についてだけではなく、日本とフランスの研究スタイルや文化の違いについても話すことができ、非常に有意義な時間を過ごしました。また、ワークショップ 2 日目の後には夕食会にも招待いただきました。フランスの研究者の方々とワインを飲みながら、リラックスした雰囲気の中で交流しましたが、さまざまな言葉が飛び交う中で日常会話レベルの英語を聞き取ることは案外困難であり、会話についていけずに置いていかれてしまうことも多く、非常にもどかしい思いをしました。

フラッシュプレゼンテーションの様子

ワークショップの最後には、フランスの先生方のご厚意で、ENS Paris-Saclay 構内の研究設備を見学させていただきました。自作の測定装置や、実験に使用されている最先端の分光機器などを間近で見ることができ、非常に刺激を受けました。中でも印象的だったのは、学生一人あたりのスペースにゆとりがあり、落ち着いた環境で研究が行われていた点です。もちろん研究にはさまざまなスタ

ENS Paris-Saclay 構内

イルや環境があると感じており、今回の見学を通じて、スペースの使い方や研究環境の整え方について新たな視点を得ることができました。今後、自分の研究活動をより円滑に進めるための工夫や考え方に、この経験を活かしていきたいと思います。

パリの街並み

学会参加の合間には、パリ市内の観光も楽しみました。パリの街並みは、建物の外観や高さが統一されており、どこを歩いても絵画のような美しさが広がっていました。エッフェル塔、凱旋門、ノートルダム大聖堂、ヴェルサイユ宮殿などを訪れ、フランスの歴史や文化に触れることができました。エッフェル塔は真下をくぐり、その鉄骨の一つひとつにまで込められた緻密な設計に感動しました。見上げると、その巨塔は想像よりもはるかに大きく、その迫力に圧倒されました。凱旋門やヴェルサイユ宮殿では豪華な装飾や広大な庭園を楽しみ、フランスの芸術性や歴史の奥深さを感じました。ノートルダム大聖堂を訪れたのは日が落ちた後でしたが、その精巧な建築の美しさは圧巻でした。振り返ると、遠くにエッフェル塔が光を放っているのが見え、異国の地で発表するという緊張と不安でいっぱいだった私の心に深く刺さるものがありました。

また、観光だけでなく、現地の市場やショッピングエリアをめぐり、フランスならではの品々を購入することも楽しみの一つでした。シャンゼリゼ通りでは、買うはずもない高級ブランド店を外から眺め、一瞬だけでもパリジェンヌになった気分を味わいました。地元のスーパーでは、フランス語しか話せない店員とのやりとりに苦戦しましたが、優しく対応してもらえました。スーパーで購入した食品はフランス語表記のため、食べるまで何かわからないものもありましたが、それもまた新鮮な経験でした。

フランスでのワークショップ参加は、研究発表にとどまらず、私にとって多くの学びと貴重な体験を得る機会となりました。言語の壁や文化の違いに直面する場面もありましたが、それ以上に異文化交流の楽しさを実感し、今後の研究活動に活かせる貴重な刺激を受けました。フランスの観光地や食文化にも触れ、視野をさらに広げることができました。一方で、英語力の不足により十分に楽しめなかったこともあり、悔いが残る遠征でもありました。今後は研究だけでなく、語学力も向上させ、海外の方々とより円滑にコミュニケーションを取れるよう努めたいと思います。

本ワークショップへの参加は「メゾヒエラルキーの物質科学」のご支援のもと実現いたしました。このような貴重な機会を与えてくださった関係者の皆様に深く感謝いたします。また、ENS Paris-Saclay の中谷圭太郎教授をはじめ、このワークショップ開催にあたり尽力いただいた運営チームの方々に厚く御礼申し上げます。